

「早く江戸になればいいのに」・・・故杉浦日向子さんの願い

杉浦日向子さんが四十六歳（一九五八～二〇〇五）の若さで喉頭がんを患い、亡くなってから既に十九年を数えます。

一貫して江戸風俗を題材にして、漫画を主にエッセイ・小説等・・・幅広い分



野で活躍。特にNHKの番組「コメディーお江戸でござる」（一九九五～二〇〇四年）では解説者として、その独

特の語り口と博識さは他の追随を許さないものがあり、

お茶の間の人気をさらっていたことを憶えておられる方

は多いことでしょう。その時代考証の確かさと、江戸を愛する気持ちの深さでは、番組プロデューサーをして「もしかしたらこの人は江戸からタイムスリップしてきた人ではないか」とまで言わしめたほどでした。

エッセイ「お江戸でござる」の中で彼女は次のように書いています。

『ああ、早く江戸になればいい』 最近よく、そう思います。東京の片隅にひ

よこんと長屋が出来て、それが次々に増えていつて東京を覆い尽くし、江戸になっ  
ってしまったばいばいになあ、と思います」

日本橋の呉服屋の娘として東京は港区芝に生まれ、幼児の頃から歌舞伎・寄

席・大相撲等と親しみ育ち、江戸の香りをたっぷり残した長屋にも住んだ経験があるという彼女は、時代考証を自らの経験に照して検証できる数少ない人だったので。彼女は現在に生きる真正の江戸っ子だったのでしょう。

彼女の江戸風俗を解説する時代考証の視点は常に「江戸側から現代を見ている。自分は江戸の町にいて、辺りを見回しながら、現代人に話しかけている」と表現する筑摩書房編集者・松田哲夫氏の言に全く異論はなく、指摘の通りだと思います。

また、日向子さんは江戸っ子であったが故に蕎麦好き人間でもありません。それも尋常なレベルではない……。

筆者もそば好き人間の端くれだと自認しているのですが、杉浦さんの域に達するには「なお道遠し」と実感させられた彼女の書いた一文をご紹介します。

「私がそば屋に行く時間帯は、いつも、午後二時から四時の間。昼食の喧騒が去り、夕刻すぎの飲み屋状態になる前。ぽっかりとした昼下がり。はあ良い午後だ。ひとりふたり焼きのりをつまみつつ手酌を傾けている。特別なものはなにも無い。ただなんとなくいいのだ。いいそば屋には居心地のいい午後がある。こんなにくつろげる場所は銭湯とそば屋ぐらいだろう。四十分もあればそば湯も飲んできちんと堪能できる。のれんをくぐれば町はほどよく暮れなずみ、夕日が頬を染め、気持ちはふっくら満ちてくる。まるで湯上りの爽快感。だから長湯(居)

は野暮なのだ。これからも、ずっとよろしく」(雑誌「太陽」・一九九八年十二月号)

当時四十歳になったばかりの彼女が何故ここまで透徹した人生観を持つに至ったか、それなりの理由がありました。

先立つこと六年、彼女は体調を崩し入院した病院で、病気は血液の免疫系の疾患で骨髄移植の他、完治する方法のない難病であることを告知されていて、多忙を極める漫画家を続けることは無理であると知り引退を決意したのです。

そしてその前年、「ソバ屋でのリラクゼーションが自分にとっての道楽だと気付いた」(編著書「もっとソバ屋で憩う」)彼女は、引退を予期していたかのようにそば好きが集う気楽な洒落の会「ソ連」(ソバ好き連)を結成しました。

「連<sup>れん</sup>」というのは、江戸時代に盛んであったと伝えられる職業・身分・年齢・性別などを超えて俳諧・陶芸・書画・盆栽など多種多様な趣味を楽しむ、今でいう趣味サークルを指します。「ソ連」はその故事に倣ったものですが、ちょうどその年に、奇しくもあのソ連邦が崩壊(一九九一年十二月)したのです。ソ連邦崩壊とソ(バ)連結成・・・杉浦さんの一寸した洒落だったのでしょう。

また、日向子さんの蕎麦哲学(何故蕎麦が好きなのか)を端的かつ的確に表した一文が残っています。それは日向子さん編著の「もっとソバ屋で憩う」(二〇〇

〇二年刊)の後書<sup>あとがき</sup>にある「ソバ好きとソバ屋好き」という一文です。少し引用し

てみましょう。

「『ソバ好きなんですよー』というひとには二種類あります。うまいソバのためには、いかなる悪条件をも乗り越えて、ひたすら邁進する求道者型<sup>ぐどうどうしや</sup>。又は、食後に、湯上りのようなリラクゼーションを堪能する悦楽主義者型。つまり、前者が『ソバ好き』、後者が『ソバ屋好き』となります。私はまごうことなく後者です・・・」

日向子さんならではの表現で見事に二種類の蕎麦好き人間を捉えています。『そば好き』はやがてそば打ちに挑むようになり、自分で打った蕎麦が一番美味しいと思うようになる。そしてついには蕎麦屋を開業、昼夜を分かたずそば打ちに励むようになるのです。

一方『蕎麦屋好き』は決してその道には進まず、自宅で自らそばを打ったり作ったりするなどとは夢々思わない・・・といえます。肩ひじ張った蕎麦道を求めるのではなく、求めているのは「ただただ蕎麦を楽しむ豊かな時の流れと場所（江戸を体感する）だけ」なのです。更にそこへ「酒・・・それも日本酒」が加われれば他に何もいららないというのです。

お手本のような蕎麦屋好きといわざるを得ませんね。彼女には蕎麦屋を透して向こう側に、愛してやまない江戸の安らぎが見えていたのでしょう。

きつと今頃は、二百年前の江戸の蕎麦屋で全身を江戸情緒にたっぷり浸しながら日本酒を傾け、蕎麦を手繰っているに違いありません。